学位（博士）論文　要旨

饗宴の民族誌

―ツバル・ニウタオ島社会の生活と「ゆたかさ」―

荒　木　晴　香

世新大学日本語文学系

Ethnography of Feasts: Life and “wealth” in the Society of Niutao Island, Tuvalu

Haruka ARAKI

Shih Hsin University

本論文は、島社会に関する文化人類学的研究の試みである。その主目的は、饗宴に関する民族誌的記述を提供して、儀礼論にも通ずる饗宴研究に貢献することと、島社会の「ゆたかさ」のリアリティに迫り、新たな「ゆたかさ」論の提示を試みることである。

本論文で研究対象としたのは、ポリネシアにある小島嶼国家ツバルに帰属するニウタオ島社会である。民族誌的データは、2006年10月から2008年3月までの約17か月間の本調査で収集したものを基盤とし、2004年と2005年のそれぞれ約2週間ずつの予備調査、2008年7月から10月までの約3か月間の追加調査での知見も活用した。また本論文では、調査地で観察、参与し得た饗宴の複数の事例を一次資料として具体的に詳述し、そこにかかわるさまざまな立場の人びとの行動、言説を丁寧にたどる手法を用いた。

以上のような問題設定と手法から、本論文は、以下のような7章構成と内容とした。第1章では、オセアニア地域における饗宴に関する先行研究を概観し、儀礼論に対する批判を踏まえたうえで、ツバル社会における饗宴研究の重要性を示した。これまでの儀礼、饗宴などに関する人類学的研究では、同種の行動様式は、社会的紐帯を確認、あるいは再生産するための場、贈与交換を通して社会関係を構築、あるいは平等化を図るための装置、さらに当該社会のコスモロジーを表象するものなどとして描かれてきた。このような機能構造論、あるいは象徴論的アプローチに対して、還元論に陥る危険性が指摘され、また儀礼を実践する人びと自身の説明を、分析的に十分尊重していないという批判があった。このような批判を認識したうえで、本論文では、チーフ制度及び伝統的クラン体系といった社会制度を切り口に、饗宴の分析を試みた。それは、ニウタオのようなゆるやかに構造化された双系社会を描くうえで、饗宴を契機として顕現する社会集団の動態をたどることが、もっとも確実な手段であると考えたためである。

第2章では、珊瑚礁島の自然環境がいかに過酷であるかを示し、さらに極小島嶼国家がおかれている経済・社会状況について、統計資料を用いながら説明した。ツバルを構成する珊瑚島は海抜が低く面積も狭く、雨量が少ないうえに、河川や淡水の湖沼はなく、人類が生活するには厳しい環境である。加えて、漁業資源以外に開発可能な資源を持たず、観光も未開発で主要な産業を持たな

い。また世界市場から遠く離れ、国土も海を隔てて分散しているため、人や物資の輸送が不便である。ツバルは国連の認定する後開発途上国であり、援助や出稼ぎに経済のかなりの部分を依存している。政治的には独立を果たしたものの、経済的自立は困難な状況にある。

ツバルの置かれているこのような状況を受けて、第3章では、海面上昇の問題について詳しく論じた。ツバルは地球温暖化によって「海に沈む国」として世界にその名を広く知られることとなったが、ツバルで起こっている海岸浸食と浸水の被害は、必ずしも海面上昇に直接的な要因があるわけではないことを示した。また、このような被害に対する住民の認識についても検証し、地球規模の環境問題に対する文化人類学からのアプローチの可能性について考察した。

第4章では、ニウタオの社会構造に関して記述し分析を加えた。ニウタオの親族制度の基盤は双系制にあり、場面、状況によってさまざまな系譜関係のたどり方が可能である。また、人生儀礼などの機会のたびに世帯の範囲が自在に変化する。これらのことが、ニウタオ社会をより捉えにくくしていた。

第5章では、第4章で示したニウタオ社会の捉えにくさという点をさらに特徴づけている、チーフ制度及び伝統的クラン体系に着目した。アリキと呼ばれるチーフの存在は、ニウタオ社会の「伝統」を象徴するものであり、その制度をめぐってはさまざまな決まり事や儀礼的行為が存在する。しかし、ニウタオの人びとはこの「伝統」を柔軟に受けとめており、同制度を維持している。このことは、親族制度に基因するゆるやかな社会的規範と合わさって、ニウタオ社会の曖昧さを一層特徴づけるものであった。

第6章では、筆者がニウタオで観察、参与したさまざまな饗宴の事例に関して詳述した。第5章で言及した「伝統」を象徴する社会制度を切り口に、これらの饗宴を分析し、饗宴を契機として現れる社会集団の構図を明らかにした。そのうえで、ニウタオの人びとがどのように饗宴とかかわり合い、それをどのように受けとめているのかを探った。クリスマスと新年を祝う年中行事で最大規模の饗宴では、日常的には意識することのないチーフ及びクランの存在が可視化され、島内の秩序関係が再確認される場となっていた。第4章、第5章で示したように、ニウタオ社会の基本的枠組みは、普段はゆるやかに構造化され、外部者には捉えにくいものであるが、集会所における饗宴がその輪郭を浮かび上がらせる場となっているのである。一方で女性が主役となる饗宴では、秩序関係の不可視化、男女間の交歓、儀礼的倒錯などが起こっていた。

第7章は総括的考察である。第6章までの上記の分析結果から、本論文では島社会の「ゆたかさ」について次のように考察した。

島社会には、日々の生活に苦労が絶えないというイメージが付きまとう。島の孤立性が高まれば高まるほど、また自然環境が過酷であればあるほど、そのイメージはより強固な先入観となる。筆者もまた例外ではなかった。筆者自身が、大型の飛行機から、小型プロペラ機、貨客船、そして小型ボートを乗り継いでたどり着いたフィールドは、越えて来た空間、そして何よりも大海原を渡って来たという身体感と、絶海の孤島というフィールドの環境から、閉塞的な社会という先入観を筆者に与えていた。しかし、滞在中にその島社会で参与観察した諸相のリアリティは、島民という当事者のまなざしに近接すればするほど、近在の島社会に関して記述された民族誌の題目にある「窮乏」という表現とは対照的に、「ゆたかさ」を感じさせるに十分であり、静態的という状況認識は、表面的な理解であると気づかされるに至った。

本論文で明らかにしてきたのは、その「ゆたかさ」の根源に、頻繁に開催される饗宴によるパフォーマンスが介在しているという民族誌的な島民にとっての真実と、その社会的かつ表象的な意味である。またその真実には、島社会としての環境的境遇と、歴史的に開かれた島であるという側面が深く関わっている。饗宴には、在地の動植物が重要な食物としてだけではなく、競合関係のツールとして機能しているし、その饗宴の一部を確実に経済的に支えているのは、島社会の外に暮らす親族・縁故者及び島出身者コミュニティからの送金なのである。

したがって、本論文は「どのように」島社会の人びとが饗宴を活性化し維持しているのかという問いから、当事者にとってのリアリティに沿い「なぜ」饗宴を必要としているのかという問いへの発展を試みた儀礼論の理論的展開でもある。当事者である島民の饗宴に対する思いは、「金と時間の無駄、良くない慣習」という負担感への不満とも聞こえる言説と、「島の伝統・やり方、我々の生き方」というポジティブな評価である。いわば「なぜ」の背景に、一見アンビバレントな言説や評価が言語化されているのである。それでも饗宴は、反復的に維持されている。その事実は、単なる機能論的解釈を越えて、饗宴が島社会の「活動的」な全体像を島民自身に再確認させる機会であるとともに、饗宴以外には、代替的パフォーマンスが考えられないと、島民自身が評価しているのではないかと、外部者である筆者に想起させるのである。饗宴はただ繰り返されているのではない。一見静態的なフィールド社会に、確かな生活のリズムとして寄与していると思われるのである。しかもその島民の語る「伝統」的機能は、ただ島社会全体の維持に貢献しているという評価に留まらず、島民は、当事者として饗宴を活かし、かつ生きているのである。「伝統」というポジティブな評価もあくまでその脈絡で成立する表現である。だからこそ「ゆたかさ」の根源ともなりうるのではないだろうか。

本論文は、饗宴の当事者である島民の行為と言説に可能な限り立脚しながら、島社会の諸相に分析を加える民族誌的考察であるとともに、儀礼論を介して、人びとにとって「ゆたかさ」という指標は何かを問う人類学的考察である。そこで問われる「ゆたかさ」とは、しばしば外部世界でステレオ・タイプ化される「平和で豊かな楽園」のイメージでは決してなく、外部者には過酷と思われる自然環境と、ある意味で共存しながら、日々の生活と饗宴を享受する島民にとっての「ゆたかさ」なのである。